

大社の境内

出雲大社に向かう道には、1915 年に大正天皇（在位期間 1912–1926）の即位を記念して建てられた白い大鳥居があります。高さ 23 ㍎、幅 14 ㍎で、境内に通じる賑やかな商店街が立ち並び通りである、神門通りの入り口に立っています。その先にはもう一つの鳥居があり、これが大社の正式な入り口となっています。この鳥居の下をくぐると、社殿へと続く珍しい下り坂の参道があります。右手には小さな祓社があり、本殿に参拝する前に祈願して祓い清めることができます。道は素戔川に架かる歩道橋を渡り、鳥居をくぐり、松並木の大通りを抜けます。参道の中央は神様のためのスペースのため、参拝者は道の真ん中を避けるように注意する必要があります。

松並木を抜けると、境内は両側に広がり、主祭神である大国主神の生涯の場面を描いた 2 つの銅像が現れます。左側の像は、大国主神が因幡の素戔を諭しているところです。神話では、大国主神は傷つき道端に倒れていた素戔に、大国主神だけが素戔に優しさを示したとされています。右の彫刻は、大国主神が若い頃に現れた 2 つの神霊を表す金色の球の前でひざまずいている姿で、大国主神の神話でも特に有名な場面を表現しています。

境内の入り口には、青銅の鳥居があります。この鳥居は 1666 年に建てられたもので、現存する日本最古の青銅鳥居の一つで、非常に珍しいものです。この鳥居は、隣の藩を治めていた毛利綱廣が祖父の業績に倣って奉納したものです。

境内に入ると、大社の神々の移動手段とされる青銅の馬と牛があります。馬は「カネウマさん」と呼ばれ、安産のご利益があるとされています。その先には拝殿があり、参拝者は通常、ここで参拝をしてから本殿へと進みます。

本殿は垣根で囲まれており、入口には精巧な彫刻が施された「八足門」があります。ここから先は、神職と神事のときなど特別な祈りを捧げる人々だけが入ることができます。一般的に本殿に祀られている神々に敬意を表するために、参拝者は門の前に立ち、「二礼」、「四拍手」、「一礼」という独特の参拝作法を行います。これは他の神社で行われる拍手の数の 2 倍です。祭事によっては、神職が 8 回拍手をすることもあります。

八足門前で参拝した後、垣根を西側に回り込む人もいます。そこには賽銭箱が設置されており本殿を拝することができる遙拝所のように なっています。本殿の中には、大国主神が祀られた内陣が西向きにあります。このためここで参拝するとき、参拝者は大国主神と向かい合うことになります。

本殿の東と西には、本殿に面して細長い建物があります。十九社と呼ばれるこの神社は、旧暦10月の神在祭に出雲にやってくる神々の住居で、全国の神々が集まり、来年の縁結びについて話し合うと考えられています。

本殿の北側には、八雲山の麓にある、小さいながらも建築的に本殿に似た神社があります。この神社は、須佐之男命が祀られている素鷲社です。